

## 《書評》

Kimberly J. Stern,

*Oscar Wilde: A Literary Life*

London: Palgrave Macmillan, 2019.

岩永 弘人

本書の著者スターンはノースカロライナ大学の助教授であり、*Salome* (Broadview Press, 2015) のエディターであるばかりでなく、*The Social Life of Criticism: Gender, Critical Writing, and the Politics of Belonging* (U of Michigan P, 2016) も上梓している。そのような経歴にふさわしく、著者は本書において、ワイルドが生涯を通じて、接触し、影響を受けた思想(主に書物や大学での講義)をジャンル別にたどり、その後その思想に対するワイルドの反応を探るという、ユニークな構成を選んだ。そのジャンルは、the biographer, the teacher, the priest, the scientist, the philosopher, the reformer の6つである。

第1章は「伝記作家」。この章は、この本全体のイントロ的な役割を果たす。内容は大きく3つに分かれる。[1]ワイルドの伝記文学に対する反応、[2]伝記の対象としてのワイルド、[3](この書物の)方法論。[1]では、ワイルドの、伝記文学に対する態度と彼自身が書いた、伝記に対する書評が紹介される。(例えばロセッティやキーツに関するもの。)[2]においては、ワイルド批評(特に伝記)を大きく3つの時代に分類して、著者の評価が語られる。まずは、シェラード、ハリスをはじめとする初期の伝記。ここでは「事実と記憶が混在している事」(11)が指摘され、その素材のきめの粗さが批判される。次の世代の代表としてはガニエ、メンデルスゾーンの名前が挙げられるが、著者はこれらからも、依然としてワイルド自身の言説から「伝記」を構築しようという傾向を感じ取る。そして第三世代は、イー

グルトンを筆頭とするワイルドをゲイ文化などのヒーローとみなす一団。(ノックスやオサリバンは、その変種とみなされている。)スターンは、このような3つの世代の伝記を概観したのち、素人でも読める *intellectual biography* の例としてスローンの著書を挙げるが、それはあまりにも短く、宗教や倫理のような大事な問題が同じ枠の中で論じられていると指摘する。一方で、今あげたどの批評書とも違う *intellectual biography* を本書で実現しようとした事が主張される。[3]においては、その際提示しようとしたのは、一貫したワイルド像ではなく、彼の「魂の進化」(18)の過程であるという事が再び強調される。

第2章は「教師」。ワイルドにとって教育の目的とは、知識や事実を暗記させる事ではなく、その学び方のプロセスや喜びにある、というのがこの章の主張である。まずは幼少時代にワイルドが受けた教育、そしてその後受けた教育を、マハフィー、シモンズ、ジュウエット、ラスキンなどの言葉を軸に総ざらいし、その後ワイルド自身の教育論が解説される。『コモンプレイス・ブック』を主たる典拠として、スターンは、オクスフォード時代、ワイルドはローマではなくギリシアの教育論(主にプラトン)に与していた事を強調する。たとえばワイルドは「美を心から愛するようにさせる事が、教育の真の目的である」というような、当時としては決して当たり前ではない教育論を展開した。(その際、彼は「暗唱」の重要性も強調したという。)続いて、教師の立ち位置についてのワイルドの考察が紹介される。ソクラテスとそのモデルとされるが、ワイルドは教師が「教育者」であるよりも前に「芸術家」であるべきだとする。その際『ドリアン・グレイの肖像』、「虚言の衰退」の引用がある。このような議論を元に、著者はワイルドがアメリカ講演旅行で広めようとしたのも同じ考え方ではなかったのかと主張する。美を愛する事が可能になった時はじめて「世界を、正当な文化的、倫理的、社会的バランスを持って、見る事が可能となる」(62)と言うのだ。ニューマンの強い影響も感じられる、現物教育の重要性を説くワイルド像が呈示されている。そもそも講演ツアー中の彼の奇抜な服装自体が「芸術家としての、教師の姿」(59)を体現したものであったと、スターンは主張する。

第3章のテーマは「聖職者」で、この章でもワイルドの幼年時代の「反カ

トリック的」な教育が詳述される。スターンは、世界はダーウィンを始めとする革新的な「科学」のせいで「不信」へと移行して行ったのではなく、むしろ「新たな神学観」がこの時生みだされたのだとする。そしてそれを代表する作家がワイルドの母であった。ワイルド自身の信仰に関するドキュメンテーションはオクスフォード時代に入って急に増える。反カトリックであったマハフィー教授の説から始まり、それがワイルドの「虚言の衰退」に影響を与え、「カトリックの聖職者は、実際、想像力の保護者たちである」(98)という考えの原点が、ワイルドの「俗なものは、必ずしも宗教的なものと相容れないわけではない」という考え方にあるとする。ワイルドの晩年については「社会主義下の人間の魂」や『書簡集』からの引用が多く、彼がどのような葛藤を経て、最終的にカトリックとして死んでいったかが、ルナンをキーパーソンとして語られていく。スターンの頭の中にあるのは「宗教を、知的な態度で捉えようとする」(117)ワイルド像である。

第4章は「科学者」である。本章では、科学と歴史・文化は切っても切れないというワイルドの科学観が敷衍される。ワイルドが、幼い頃から熱心な科学雑誌の読者であった事がまず指摘される。また、当時の「科学」が、現代の「経験主義」、「分類」、「事実に基づいた知識」にとどまらず、「想像力」、「共感」、「驚き」という徳目を理解するための、より間口の広い「道具」であった事が指摘される。ワイルドにとって科学的考察は「人間の、世界に対する好奇心の生きいきとした表現であり、最高の形をとる時、それは事実上詩人の仕事と区別ができなかった」(136)。このような科学観に最初に目を開かせた人物として父親の存在が紹介される。幼いワイルドが父とともに遺跡の発掘作業に励んだのも、このような文化理解の道具としての「科学」の一例と言えよう。

オクスフォードに入学してからは、彼はペーターから「科学的なもの」と審美的なものとの融合」(147)を感得し、原子が運動するように人間の文化も絶えず運動するという考え方を持つようになる。また、ハーバート・スペンサーが、ペーターと同じ事を社会レベルで論じたとする。この後「仮面の真実」からの引用があり、「暗号解読者としての科学者」(146)という考え方が示される。ワイルドにとって「科学」は、他の学問のオルタナティブではなく、むしろ形而上学的な真実を考えるための補完物であったとす

る。

第5章は「哲学者」。章全体としては、ワイルドの哲学観が一貫したものでなかったという考えが述べられている。当時のイギリス（特にオクスフォード）ではドイツ観念論が支配的であり、ペーターもヘーゲルやシェリングから大きな影響を受けていた。スターンは、「歴史主義批評の勃興」がヘーゲルの影響を大きく受けたものである事を認めつつも、むしろショーペンハウアーのような、きっちりと体系を作らない哲学者にワイルドが惹かれていったと指摘する。ワイルドの「功利性 (utility) は、非常にしばしばより高次の思想の探求の邪魔になる」（「中国の賢者」）という論理を、著者は哲学自体にも当てはめる。

スターンは「審美的瞑想を通じて、人は関与し、進化する」(194) という風に、ワイルドの哲学観をパラフレーズしているが、その上で彼女は、ワイルドが純粋に「観念論者」(idealist) であると考えた事は性急であり、むしろ現代のポスト構造主義者に近いと考える。「<美>の高次の形は、事実上<真実>と区別がつかない」とワイルドは語るが、<魂>と<物質>のような対立概念も、単なる二分法では把握できない物で、それは一直線上にある、という考えが彼のロジックの根底にあったと思われる。むしろ、矛盾や不一致は「瞑想」のきっかけになるという点で価値があり、このような折衷主義がワイルドを審美主義者(ダンディ)に向かわせたとする。

第6章「改革者」では、最初にワイルドの政治へのコミットの度合いについて両極端の意見が紹介されるが、著者自身は否定的な方に与する。その一因として、「ワイルドの時代、「改革」(reform) はしばしば「行動」(action) を意味した」(220) という点が挙げられている。『ヴェラ、実は虚無主義者達』、「すばらしいロケット」、『なんでもない女』、『まじめが肝心』において「改革」のファルス性が前景化されたあと、スターンはワイルドの「改革」への反発の原因を、2点に整理する。[1] 1つの行動へのコミットは目的論的な危険を伴う。[2] 社会を表面的にいじるだけになる恐れがある。対案としてワイルドは「社会は<自然>の命じるままに、進化していくべきだ」(225) と考えていた。

その後、ワイルドの、アイルランドやイギリスに対する政治的立場(例えば女性問題、社会主義との向き合い方)の曖昧性がさらに指摘される。

ワイルドにとって「社会主義」は結局「個人の自由を最大化するための哲学」(236)であり、そのため彼は現実の事物を重視し、それがハンディクラフトの勧めにも繋がっていった。言いかえると、ユートピアなどというものは存在せず、「現状を少しずつ変えていくしかない」、というのがワイルドの基本的な考え方であった。それ故、ワイルドは特定の政治理念にとらわれる事なく、「思想」を「行動」に「翻訳」していく事で、彼なりに「改革」に寄与しようとしたのではないか、というのがスターンの、本章、そして本書の「結論」である。

本書は<伝記>というよりは<入門書>である。スターンは本書を *intellectual biography* と位置づけ、ワイルドが生きていく上で受けた知的影響を、クロノロジカルではなく、ジャンル別に整理し論じた。これは、今までになかったユニークな手法であると思われる。ただ、このやり方だと2つ以上のジャンルにかかわる人物や思想が存在する事になり、章立てに多少の無理が出ているような印象は拭えない。だが、それを承知の上で通読すれば、ワイルド文学とその背景にある社会の関係やその彼の知の源泉を、一段高い場所から俯瞰できる好書であると言えるだろう。

以下の通り、誤植が散見された。(33頁 vol. 7→vol. 6、114頁 it→it is、185頁 forebear→forebearer、194頁 oumt→out、200頁 Wilde, inscribes→Wilde inscribes、238頁 such a that→such that、242頁 things→thinks)